北海道・東北地方の花街における建築用途の変遷

— 山形市七日町・酒田市今町を中心として —

TRANSITION OF BUILDING IN KAGAI OF HOKKAIDO AND TOHOKU REGION

— Focuses on Nanokamachi in Yamagata and Imamachi in Sakata —

佐藤智文 — * 1 岡崎篤行 — * 2
松井大輔 — * 3

Tomofumi SATO — * 1 Atsuyuki OKAZAKI — * 2
Daisuke MATSUI — * 3

キーワード：
花街、花柳界、料亭、遊郭、北海道、東北、山形、酒田

Keywords:
Kagai, Geisya society, First-class Japanese restaurant, Red-light district, Hokkaido, Tohoku, Yamagata, Sakata

Kagai (traditional entertainment district) has inherited various Japanese culture. Kagai of Hokkaido and Tohoku district escaped the air raid in World War II. So these Kagai districts still have historical buildings. Purpose of this study is to grasp the outlooks of Kagai in Hokkaido and Tohoku district, and to analyze the transition of building use in Nanokamachi-Kagai and Imamachi-Kagai.

1 はじめに

1-1 研究の背景と目的

花街は日本舞踊や邦楽等の古典芸能や茶道、華道等の日本の伝統的な文化を総合的に継承している場であり¹⁾、建築的にも料亭、置屋、待合、検番等の花街特有の建造物が多い。ここでいう花街は近代以降に遊郭^{注1)}と分離されたものとする。近年になり花街の価値は見直されつつあるが、その一方で料亭の廃業等により衰退傾向にある。歴史的な花街建築も年々消失しており、早急に保全に向けた取り組みが行われることが望まれる。

本研究の対象とする北海道・東北地方を含む地方都市の花街は、その多くが第2次世界大戦における戦災を免れており、現在も花街に関する建造物を含めた歴史的建造物が比較的良好な状態で残存している。近年花街に関する研究は進んでいるが、全国を網羅する研究は完遂されていない。特に建築学の観点から北海道・東北地方の花街を対象とした研究は見られない。同地方の花街では近年、花柳界を活性化していこうとする動きが高まっているが、そうした中で過去の花街の範囲と規模、用途分布及びその変化を明らかにすることは、今後重点的に保全すべき範囲と建物を把握する上で参考となる。本研究は北海道・東北地方の花街の概況を調査した上で、中でも重要と思われる山形市七日町花街・酒田市今町花街について、花街における保全活動の基礎資料となるために建築用途の変遷を明らかにすることを目的とする。

2 研究の位置付けと方法

2-1 研究の位置付け

本研究に関連がある研究として、古町花街において花街の形成・変容過程、花街建築の残存状況及び外観特性を扱った研究²⁾、神楽坂花街について歴史的建造物の残存状況と景観の変容を扱った研究

³⁾ などがある。また、京都下之森花街について用途等の変遷を明らかにした研究⁴⁾、古町花街について花街を構成する建造物の分布に関する戦後最盛期と現在の比較を行った研究⁵⁾、金沢市ひがし茶屋街を対象として同様の研究を行った研究⁶⁾ などがある。北海道・東北地方の花街に関する研究としては、郷土史の観点から山形、酒田の花街について扱った書籍(表1)などがある他、両地域の花街における花街建築の残存状況及び外観特性に関する研究がある⁷⁾。しかしこれらの地域について建造物の分布に関する戦後最盛期と現在の比較を行った研究は未だ無い。またその他の東北・北海道地域における花街について、建築学の観点から行われた研究は見られない。

2-2 研究の方法

本研究では初めに北海道・東北地方における花街の存否と概況の把握を行う。花街の存否は料亭及び芸妓が通常的に営業を行っているかどうかで判断する。東北地方の花街に関する調査は文献^{8) 9)} から、かつて花街があったことが判明した33都市についてウェブ検索、電話によるヒアリングを行い、現在の花街の存否を確認する。確認された6都市のうち、性質の異なる温泉地^{注2)}の1都市を除いた5都市を対象とする。北海道地方の花街に関しては現在花街の確認された札幌の他、北海道・東北地方で1940年代の人口が多い^{注3)}函館・小樽^{注4)}についても概要を調査した。調査では花街の形成年代、最盛期の年代、最盛期の芸妓数及び料亭数については、表1の史料に記載された情報を参考とした。また現在の芸妓数及び料亭数は、芸妓、芸妓支援組織、料亭等の現在の花街の事情に詳しい関係者へのヒアリングによって得られた情報に基づいている。

建築用途の変遷は山形市七日町花街と今町花街を対象とする。これは両花街が、目視の結果から歴史的建造物の残存状況が良いこと、料亭と芸妓が多いこと、若手の芸妓をほぼ毎年輩出しており持続的な花柳界であるためである。比較時点は、戦後の花街最盛期であり、

¹⁾ 新潟大学大学院自然科学研究科
(〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050番地)

²⁾ 新潟大学工学部建設学科 教授

³⁾ 新潟大学工学部建設学科 助教

¹⁾ Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ.

²⁾ Prof., Department of Civil Engineering and Architecture, Faculty of Engineering, Niigata Univ.

³⁾ Assist. Prof., Department of Civil Engineering and Architecture, Faculty of Engineering, Niigata Univ.

また確認された中で最も古い住宅地図が残る昭和 30 年代と現在との 2 時点とする。基礎資料としては住宅地図を用いるが、置屋、花街関連建築(図 3)の所在等は住宅地図からはわからないため、これらに関して、山形においては芸妓 1 名、住民 1 名、酒田においては芸妓 1 名の事情に詳しい人物^{注 5)}にそれぞれヒアリングを行った。また本研究では、おおそ 1945 年以前に建てられた建造物を歴史的建造物と定義して、既往研究⁷⁾から明らかになっているこれらの建造物の転用について調査・分析を行っている。

3 東北地方・北海道地方における花街の概要

3-1 札幌市薄野

札幌では明治初期に道都建設に際し労働者が移住してきたことを契機に開拓使によって官許遊郭の設置が計画され、明治 4(1871)年現在の南四条から六条と西三丁目から四丁目を結ぶ 2 町四方が遊郭街として建設されたことが花街の始まりであると考えられる。大正 7(1918)年に開道 50 年記念北海道博覧会の開催が決まると、人口の増加によって市街地化していた薄野からの遊郭移転の要望が高まり、同 9 年に白石へ移転された。その結果薄野には芸妓の花街が形成された。花街は昭和初期に最盛期^{注 4)}となり、料亭・料理屋が約 40 軒、芸妓は約 280 名いたとされ、北海道大学の学生にも利用された。また昭和 37(1962)年には料亭 42 軒、芸妓 213 名が確認された。現在は料亭 1 軒、芸妓 11 名となっている。新人育成のための支援組織等はないものの、料亭さわ田の元女将が個人で新人芸妓の指導を行っている。芸妓は料亭の他ホテルなどへ出向する場合もある。

3-2 小樽市花園町

小樽では安政 3(1856)年までは女人禁制であったため、遊郭等はいなかった。明治初期になると金曇町(現信香町)が遊郭として指定され検番が設置された。明治 14(1881)年の大火により金曇町及び新地町を含めた遊郭が被害を受け住之江町周辺へ移転された。海陽亭などの料亭が開業し、花園町近辺の東雲町に検番が置かれたことで花街が形成されていった。遊郭は後に町中にあることが問題となり、明治 29(1896)年に発生した火災を契機として明治 34(1901)年頃までには、内陸部松ヶ枝に移転され、その頃手宮にできた北廓に対して南廓と呼ばれた。花街は大正年間に入ると最盛期となり、芸妓 106 名、半玉が 37 名いた。現在は花園町近辺の住吉町に海陽亭 1 軒が営業しており、芸妓はいないが札幌から呼ぶことが可能である。

3-3 函館市蓬萊町

函館では享和 3(1809)年に上山町(現船見町)で茶屋営業が公許され、後に函館遊郭と呼ばれるようになった。明治 4(1871)年 4 月に起こった切り店火事と呼ばれる火災により、山ノ上遊郭は壊滅的な被害を受けた。近隣では住宅が増加していた事情もあり、遊郭は蓬萊町に移転された。蓬萊町では明治 11(1878)年に女紅場が開設されており、正業への転職を支援する目的で、主に裁縫等の工芸が教授された。函館花街の最盛期については不明であるが、1895(明治 28)年の記録で芸妓が 148 人いたことが分かっている。明治 40(1907)年に大火が起こり蓬萊町は被害を受け、遊郭はこれを機に大森町に移転された。これにより遊郭と花街が分離されたと考えられる。現在は料亭が 1 軒営業しているが芸妓はいない。

3-4 盛岡市八幡町・本町

盛岡では宝永年間(1704～1711)に八幡神社の門前町である八幡町

で茶店が営業するようになり、また公官庁の近くに所在する本町にも料亭街が形成され、八幡町と競い合う形で発展した。それぞれ幡街と本街と呼ばれて区別され、利用客も八幡町では商人が多かったのに対して本町では役人が多かった。八幡町の花街は明治 17(1874)年に発生した河南大火により被害を受けたものの、その後復旧を果たした。明治末期の八幡町花街では料亭と娼妓が営業を行い遊郭の機能を持つ貸座敷が混在しており、昭和初期においてもこのような貸座敷があったとされる。花街は大正時代に最盛期となり、料亭が八幡町に 11 軒、本町に 15 軒あり、この他市内に 7 軒の料亭があった。芸妓に関しては八幡町で 80 名、本町で 60 名であった。また昭和 25(1950)年には 25 名の芸妓がいたとされる。盛岡では伝統的に置屋が無く世襲制が採用されていた。現在は花街の衰退に伴い八幡町と本町の花柳界としての区別はなくなり、料亭は八幡町に 1 軒、本町及びその周辺に 2 軒が営業している。この他ホテル等に芸妓を呼ぶこともできる。芸妓は 5 名いる他、平成 24(2012)年に設立された盛岡芸妓後援会により新たに 2 名の芸妓の育成が行われている。

3-5 秋田市川反

秋田では江戸中期から末期頃に遊郭が許可されたとされ、年代は不明であるが下米町二丁目に遊郭が形成された。明治 19(1886)年の火災により下米町の遊郭は全焼した。再建に際して遊郭は南鉄砲町へ移転され、料理屋と置屋は当時建物の少なかった川反三丁目、四丁目へと移転された。これによって花街と遊郭が分離されたと考えられる。花街は昭和初期に最盛期を迎え、料亭が約 40 軒、200 名余りの芸妓がいた。また昭和 28(1953)年には約 50 名の芸妓がいたとされる。現在は 3 軒の料亭が営業しておりこの他ホテル、レストランへの芸妓の派遣も行っている。組合組織や検番は無い。芸妓は 3 名いるが、従来からの川反芸者は一旦途絶えており、いずれも 2014 年に創設された「株式会社せん」の社員として活動している。

3-6 仙台市本櫓丁

仙台では寛治 3(1660)年以降、貸座敷・料亭の営業が禁止されていたが、明治 2(1869)年、国分町周辺に遊郭が建設された。明治 27(1894)年に広瀬川対岸に軍の駐屯地ができたことを契機に遊郭は小田原(現旅籠町周辺)に移転され、料亭を中心とする花街が国分町周辺の本櫓丁(現立町)に形成された。花街は昭和 40 年代頃が最盛期とされ、料亭と置屋がそれぞれ 60 軒ほどあったとされる。現在は市内に 3 軒の料亭が営業しており、この他ホテルやレストランへの芸妓の派遣も行われている。仙台芸妓置屋組合と仙台枝芸振興の会の支援により 5 名の芸妓が活動しており、平成 26 年現在、地元経済界が中心となり株式会社制の後継者育成制度の創設が検討されている。

3-7 山形市七日町

山形では明治 6(1873)年に旅籠町に創業したのゝ村を初めとした料亭が市内に散在していたが、明治 40(1904)年の市北大火によって七日町が被害を受けると、その復興に際して料亭千歳館が中心となり待合、置屋が集積した花小路を、それまで桑畑であった七日町の北側に整備した。遊郭は明治 17(1884)年に小姓町に指定されていたため、花街と遊郭は当初から分離されていたと考えられる。花街は昭和初期に最盛期となり、花小路を中心として市内に 32 軒の料亭、150 名余りの芸妓がいた。現在は市内に 8 軒の料亭があり、内 6 軒の大規模な老舗料亭により六曜会と呼ばれる組織が構成されている。芸妓は山形芸妓置屋組合に所属する芸妓 5 名と、1996(平成 8)年に

設立され、毎年継続的に新人の募集を行っている山形伝統芸能振興株式会社(愛称:やまがた紅の会)に所属する若手社員芸妓 9 名が活動している。

3-8 酒田市今町

酒田は北前船による舟運で栄えた江戸中期頃に今町(現日吉町)、船場町、高野の浜(現新町)の3か所に遊郭が形成された。今町は3か所のうちで最も格式が高く、主に北前船で酒田を訪れる商人や地元の豪商によって利用されたとされる。明治27(1894)年に発生した酒田大震災を契機として今町の貸座敷は新町へ移転し、料亭からなる花街が形成された。花街は昭和初期頃に最盛期を迎え、昭和4(1929)年には110名余りの芸妓がいたとされる。1976(昭和51)年に発生した酒田大火の被害を免れ、現在は料亭が3軒営業しており、この他観光施設として活用されている料亭建築が3軒ある。芸妓は1名、「舞娘さん制度」によって株式会社平田牧場が運営する観光施設相馬樓の社員として育成されている若手社員芸妓「酒田舞娘」が4名いる。「舞娘さん制度」は1990(平成2)年に新潟の制度を参考にして創設されたもので、毎年継続的に新人の募集を行っている。

3-9 全体的傾向

調査の結果から、現在の北海道・東北地方の花街は料亭が中心となっていることが確認され、茶屋を中心とする京都や金沢の花街とは性質が異なると考えられる。また加藤が指摘しているように¹⁰⁾、明治から大正にかけて花街と遊郭の分離が起こったことが北海道・東北地方の花街においても確認された。移転に際しては小樽・函館・秋田・酒田の4事例では火災、札幌では博覧会、仙台では近隣への軍施設の建設がその契機になっていることが確認できた。

表1 参考資料一覧

対象地	著者	史料名	出版年
札幌	札幌市教育委員会	札幌市史 第3巻 通史3	1994
	札幌市教育委員会文化資料室	札幌文庫・別冊札幌歴史写真集(明治編)	1982
	札幌三業会	札幌三業会芸妓芸能大会パンフレット	1962
	小樽市	小樽市史 第1巻	1958
小樽	小樽市談会	ふるさとの思い出 明治・大正・昭和 小樽	1979
函館	函館市史編集室	函館市史 通史編第3巻	1997
	須藤隆仙	ふるさとの思い出 明治・大正・昭和 函館	1978
盛岡	盛岡市	盛岡市史 第7巻	1980
	及川和哉	ひだりづま 盛岡芸者いまむかし	1991
	八幡第2町内会	八幡町界隈の思い出 戦後60年の今昔	2005
	盛岡市立図書館	なつかしのアルバム 盛岡写真帳	1984
	森ノフ	目で見る盛岡・岩手・紫波の100年	2001
	上村行彰	日本遊里史	1929
秋田	秋田市	秋田市史 第四巻 近現代I 通史編	2004
	佐藤清一郎	秋田県遊里史	1983
	黒川一男	川反いまむかし	1995
	武藤守	あきたの灯/川反物語	1965
	脇野博	ふるさと秋田市	2009
	阿部甲	思い出のアルバム 秋田市 昭和編	1984
	阿部甲	秋田市いまむかし	1990
	仙台市史編集委員会	仙台市史1	1974
仙台	田村昭	仙台花街繁昌記	1974
	仙合なつかしクラブ	仙合なつかし写真展	2001
	河北新報出版センタ	忘れかけの町・仙合～昭和40年代そして今～	2005
	山形市史編集委員会	山形市史 別巻2 生活・文化編	1976
山形	田中 邦太郎	山形街角の履歴書	1993
	山形街角編集室	街の履歴、人の記憶	2008
	山形街角編集室	山形街角 隔月刊第39号	2007
	大久保 義彦	山形市の120年	2009
	酒田市史編集委員会	酒田市史 改訂版 上巻	1987
	田村寛三	酒田ききあるき	1979
酒田	田村寛三	酒田風土記	1998
	田村寛三	酒田湊繁昌記	1992
	田村寛三	酒田遊所の賑わい	2004
	不明	庄内案内記	不明
	日吉会	酒田日吉町物語	1983
	三上重義	絵はがきが伝える 明治・大正・昭和庄内酒田写真集	2006

①札幌市 ②明治前期 / 昭和初期 ③206,103 人 ④無 ⑤280 人 / 40 軒 ⑥11 人 / 1 軒 ⑦川甚 ⑧無	薄野 高砂楼 (明治 40 年頃)	①小樽市 ②明治初期 / 大正 ③164,282 人 ④無 ⑤143 人 / 不明 ⑥0 人 / 1 軒 ⑦海陽亭 ⑧無	花園 角島楼 (年代不明)
①函館市 ②江戸後期 / 不明 ③203,862 人 ④有 ⑤不明 / 不明 ⑥0 人 / 1 軒 ⑦富茂登 ⑧無	蓬萊町 蓬萊町 (明治 40 年頃)	①盛岡市 ②江戸中期 / 大正 ③79,478 人 ④無 ⑤140 人 / 26 ⑥7 人 / 3 軒 ⑦喜の字 駒龍 京極 ⑧盛岡芸妓後援会	八幡町・本町 八幡町 (大正時代)
①秋田市 ②明治前期 / 昭和初期 ③61,791 人 ④無 ⑤150 人 / 40 軒 ⑥3 人 / 3 軒 ⑦濱乃家 亀清 志田家 ⑧株式会社せん	川反 川反 (大正時代)	①仙台市 ②明治後期 / 昭和中期 ③223,630 人 ④有 ⑤不明 / 60 軒 ⑥5 人 / 3 軒 ⑦東洋館 春風亭 大多安 ⑧仙台芸妓置屋組合 仙台芸妓振興の会	本郷丁 本郷丁 (年代不明)
①山形市 ②大正 / 昭和初期 ③69,184 人 ④無 ⑤140 人 / 32 軒 ⑥14 人 / 8 軒 ⑦千蔵館 四山楼野・村 揚妻 亀松閣 嘯月 山水 浜なす ⑧六曜会やまがた紅の会 山形芸妓置屋組合	七日町 七日町 (大正時代)	①酒田市 ②江戸後期 / 昭和初期 ③不明 ④無 ⑤150 人 / 不明 ⑥5 人 / 3 軒 ⑦香梅咲 治郎兵衛 玉勘 ⑧舞娘茶屋 鑑蔵書庫 相馬樓	今町 今町 (昭和初期)
①所在地 ②形成年代 / 最盛期 ③1940 年代の人口 ④戦災 ⑤最盛期芸妓数 / 料亭数 ⑥現在の芸妓数 / 料亭数 ⑦現在の料理屋名 (範囲外のものも含む) ⑧花街関連組織			

図2 北海道・東北地方の花街

4 山形県内の花街における建築用途の変遷

4-1 対象地概要

七日町花街(図 4)は霞城公園の東側に位置し、山形市内で唯一花街建築が集積している。対象範囲内にある4軒の料亭の内、千歳館、のゝ村、四山楼の3軒の料亭は六曜会に属している山形でも老舗の料亭である。千歳館は大正4(1915)年に建築された和洋折衷様式の料亭で現在登録有形文化財となっている。別館における昼食時の営業を行う等の新しい試みも成されている。他2軒も増改築が成されてはいるが、戦前の大規模な料亭建築として重要である。現在これらの料亭が面している紅花通りは拡幅が計画されている。

今町花街(図 5)は酒田港の北東側に位置しており、対象地及びその周辺に現役の料亭が集積している。日吉町周辺は昭和51(1976)年に発生した酒田大火の被害を免れており、歴史的建造物が残存している。また後述するように対象範囲内には現在観光用の公開施設となっている元料亭建築として相馬楼、山王くらぶ、割烹小幡の3軒があるが、この内相馬楼と山王くらぶはともに明治28(1895)年頃に建築され、現在は登録有形文化財となっている。

4-2 用途の分類(図 3)

建築物の用途を花街用途と一般用途に分類する。花街用途はさらに料亭、待合、置屋、観光用の公開施設となっている元花街建築、花街関連用途に細分類する。花街関連用途には歌舞練場、検番、稽古施設等が含まれる。一般用途は商業用途、住居用途、その他に分類する。また建築物以外として、景観に関する影響が大きいと思われる駐車場、空地を別途取り上げることとする。

4-3 調査資料

七日町花街については「山形家屋明細図¹¹⁾」、「住宅明細地図 山形市(昭和50年)」、「ゼンリン住宅地図 山形市(平成24年)」を主な資料として参照した。今町花街については「酒田市住宅明細図¹²⁾」、「住宅地図 酒田市(昭和57年)」、「ゼンリン住宅地図 酒田市(平成24年)」を主な資料として使用した。表2、3はこれらの史料及びヒアリングから昭和中期の時点で花街用途と確認できた建築または敷地についてその後の用途の変化を記載したものである。

4-4 七日町花街における建築用途の変遷

(1) 昭和中期における用途分布

昭和36(1961)年の七日町花街では建築物合計数が362軒であり、うち三業及び花街関連用途が40軒確認された。この内三業用途は料亭22軒、待合7軒、置屋5軒であった。また花街関連用途は邦楽器店、髪結等が6軒確認された(図6)。一般用途建築に関しては、商業191軒、住居98軒が確認された(表6)。全体としては商業用途の建造物が多い傾向にあり、商業施設と住宅が混在していた。

(2) 現在における用途分布

平成24(2012)年の七日町花街では建築物合計数が314軒であり、うち三業及び花街関連用途が6軒確認された。この内三業用途は料亭4軒、待合0軒、置屋1軒であった。花街関連用途は昭和34年には無かった検番が確認された(図7)。一般用途建築に関しては、商業188軒、住居99軒が確認された。また駐車場及び空地が38件確認された(表6)。

(3) 用途分布の比較

建築物合計数は362軒から314軒へと48軒減少している(表6)。花街建築に関して昭和中期には花小路西側の区画にも料亭等が確認

された。また昭和中期にあった待合が無くなっている。七日町花街では料亭が昭和30年代から50年代にかけて急激に減少し、現在確認されている歴史的な花街建築は10軒である(表2)。しかし大規模なものを含め4軒の料亭が現在も営業している。一般用途建築に関しては駐車場及び空地が2件から38件へと増加している(表6)。

4-5 今町花街における建築用途の変遷

(1) 昭和中期における用途分布

昭和36(1961)年の今町花街では建築物合計数が345軒であり、うち三業及び花街関連用途の建築が11軒確認された。この内三業用途は料亭8軒、待合2軒、置屋0軒であった。花街関連用途は料理屋組合事務所(検番)が確認された(図8)。置屋が0軒となっているのは、今町花街では芸妓が料亭に所属する内芸妓制が採られていたためである。一般用途建築に関しては商業153軒、住居154軒が確認され、商業と住居の割合が等しかった(表7)。

(2) 現在における用途分布

平成24(2012)年現在の今町花街では建築物合計数が238軒であり、うち三業及び花街関連用途が5軒確認された。この内三業用途は料亭2軒、現在は営業を終了して観光施設として公開されている元料亭建築3軒が確認された(図9)。一般用途建築に関しては、商業77軒、住居150軒が確認された。また駐車場及び空地が65件確認された(表7)。

(3) 用途分布の比較

建築物合計数は345軒から238軒へと107軒減少しており、七日町花街と比較して大きく減少している。花街建築に関して、昭和中期には上台町の西側の区画にも料亭等が確認された。七日町花街同様、昭和中期にはあった待合が無くなっている。現在確認できる歴史的な花街建築は5軒である(表3)。今町花街では昭和30年代には既に歴史的な花街建築が少なかったが、廃業した料亭を公開施設とすることで保全が図られている(表5)。一般用途建築に関して、昭和中期と比較して商業用途が約半数に減少している。また駐車場及び空地が2件から65件へと増加している(表7)

図 3 建築用途の分類

図 4 現在の七日町花街

図 5 現在の今町花街

図6 昭和中期の七日町花街における用途分布

図7 現在の七日町花街における用途分

図8 昭和中期の今町花街における用途分布

図9 現在の今町花街における用途分布

表 2 七日町花街における花街建築の用途の変遷 ⁹⁾

区画 番号	敷地 名称	昭和34年		昭和50年		平成24年	
		名称	用途	名称※1	用途	名称	用途 廃建※2
A	1	吉野寿し	●Ⅰ	ばんどり	△	天神	△ x
	2	みしま	●Ⅰ	最上川	△	あおいむぎ	△ x
	3	白馬	●Ⅰ	—	—	他の敷地と統合	△ x
B	4	つる代	●Ⅱ	—	●Ⅲ	山形紅の会	●Ⅲ x
	5	料理ばづみ	●Ⅱ	ばづみ	●Ⅰ	チョロン	△ x
	6	若田	○	—	△	ホテルばづみ	△ x
C	1	小料理萬家	●Ⅰ	—	□	Watanabe	△ x
	2	初音家	●Ⅰ	橋	△	—	□ x
	3	佐藤	●Ⅰ	佐藤	○	—	□ x
D	1	旅館嬢しの	●Ⅱ	味の三平	△	かむろ/花ちゃん/ランドロフ	△ x
	2	美春	●Ⅲ	山形観光飲食料業組合	△	空き家	その他 x
	3	美まつ	●Ⅲ	—	△	四郎兵衛	△ x
E	2	つた	●Ⅱ	山新バスポート	△	—	□ x
	3	料理喜園	●Ⅰ	—	□	空き地	△ x
	4	千成	●Ⅱ	花菜	△	ナイトイン花小路ビル	△ x
F	5	料理竹ノ家	●Ⅱ	潮菜	△	山菜フィルター(株)	△ x
	6	山崎峰店	○	セブン	△	北園	△ x
	7	旅館亀家	●Ⅱ	—	□	駐車場	△ x
G	8	料理一風	●Ⅰ	—	□	レインボーハウス七日町	△ x
	1	千歳館	●Ⅰ	千歳館	●Ⅰ	千歳館	●Ⅰ x
	2	おまつ	●Ⅱ	おまつ	●Ⅱ	おまつ	●Ⅱ x
H	3	料理龍の森	●Ⅰ	龍の森	●Ⅰ	—	□ x
	4	みやこ	●Ⅰ	やまびこ別館	△	駐車場	△ x
	5	紀文	●Ⅱ	紀文	●Ⅱ	—	□ x
I	6	鶴長	●Ⅱ	南花小路	△	南花小路	△ x
	7	料理叶家	●Ⅰ	石近	△	すみれ	△ x
	8	新馬	●Ⅰ	—	□	花まる	△ x
J	1	秀本	●Ⅲ	他の敷地と統合	—	他の敷地と統合	△ x
	2	青葉	●Ⅲ	—	□	底なす分店	△ x
	3	ふじ村	●Ⅲ	—	□	七日町イン	△ x
K	1	小料理容	○	小料理容	○	おやま理美容所	△ x
	2	三原	●Ⅲ	—	●Ⅲ	—	□ x
	3	割烹四山楼	●Ⅰ	割烹四山楼	●Ⅰ	割烹四山楼	●Ⅰ x
L	4	小料理朝来	●Ⅰ	—	□	空き家	その他 x
	5	小料理音楽舞	●Ⅰ	空き地	△	Sam	△ x
	6	小料理福六	●Ⅰ	—	□	他の敷地と統合	△ x
M	1	喜久家	●Ⅰ	喜久家	●Ⅰ	他の敷地と統合	△ x
	2	料亭の夕村	●Ⅰ	料亭の夕村	●Ⅰ	料亭の夕村	●Ⅰ x
	3	慶喜	●Ⅰ	慶喜	●Ⅰ	慶喜	●Ⅰ x
N	4	中村美容	○	中村美容室	△	中村美容室	△ x
	5	中村美容	○	中村美容室	△	中村美容室	△ x

●Ⅰ：料亭 ●Ⅱ：待合 ●Ⅲ：書屋 ●Ⅳ：公開施設(元料亭) ○：花街関連 △：商業 □：住居 ◇：駐車場・空地
※1—は個人住宅名 ※2歴史的建造物であるものを○、そうでないものを×と表記

表 3 今町花街における花街建築の用途の変遷 ⁹⁾

区画 番号	敷地 名称	昭和36年		昭和57年		平成24年	
		名称	用途	名称※1	用途	名称	用途 廃建※2
A	1	小料理玉屋	●Ⅰ	—	□	—	□ x
	2	割烹相馬屋	●Ⅰ	割烹相馬亭	●Ⅰ	相馬楼	●Ⅳ x
	3	割烹香梅楼	●Ⅰ	割烹香梅楼	●Ⅰ	料亭香梅楼	●Ⅰ x
B	4	鈴政寿し	●Ⅰ	美濃土路	△	—	□ x
	5	料理屋組合	○	駐車場	◇	駐車場	△ x
C	1	治郎兵衛	●Ⅰ	割烹治郎兵衛	●Ⅰ	治郎兵衛	●Ⅰ x
	2	割烹山王クラブ	●Ⅰ	割烹山王クラブ	●Ⅰ	山王会	●Ⅳ x
D	1	ひさ	●Ⅱ	割烹ひさこ	●Ⅰ	空き地	△ x
	2	料理藤助	●Ⅰ	空き家	その他	—	□ x
E	1	宇八	●Ⅰ	白ばら	△	白ばら	△ x
	2	貸座小唄	●Ⅱ	割烹小唄	●Ⅰ	旧割烹小唄	●Ⅳ x

●Ⅰ：料亭 ●Ⅱ：待合 ●Ⅲ：書屋 ●Ⅳ：公開施設(元料亭) ○：花街関連 △：商業 □：住居 ◇：駐車場・空地
※1—は個人住宅名 ※2歴史的建造物であるものを○、そうでないものを×と表記

表 4 七日町花街における花街建築の転用

		平成24年									
		料亭(軒)	待合(軒)	書屋(軒)	公開施設(軒)	商業(軒)	住居(軒)	その他(軒)	駐車場・空地(件)	敷地統合(件)	合計
昭和34年	料亭(軒)	4	0	0	0	10	2	2	1	3	22
	待合(軒)	0	0	0	0	5	1	0	1	0	7
	書屋(軒)	1	0	0	0	0	2	1	0	1	4
花街関連(軒)	花街関連(軒)	0	0	1	0	3	2	0	0	0	6
	合計	5	0	1	0	19	7	3	2	4	39

表 5 今町花街における花街建築の転用

		平成24年									
		料亭(軒)	待合(軒)	書屋(軒)	公開施設(軒)	商業(軒)	住居(軒)	その他(軒)	駐車場・空地(件)	敷地統合(件)	合計
昭和36年	料亭(軒)	2	0	0	2	1	3	0	0	0	8
	待合(軒)	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2
	書屋(軒)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
花街関連(軒)	花街関連(軒)	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	合計	2	0	0	3	1	3	0	2	0	11

表 6 七日町花街における建築物軒数及び敷地件数の変化

	商業建築(軒)	住居建築(軒)	料亭(軒)	待合(軒)	書屋(軒)	公開施設(軒)	花街関連(軒)	その他(軒)	不明(軒)	駐車場・空地(件)	合計(建築)	合計(全)
昭和34年	191	98	22	7	5	0	6	18	15	2	362	364
平成24年	188	99	4	0	1	0	1	20	5	38	314	356
増減	▼3	1	▼18	▼7	▼4	0	▼5	2	▼10	36	▼48	▼8

表 7 今町花街における建築物軒数及び敷地件数の変化

	商業建築(軒)	住居建築(軒)	料亭(軒)	待合(軒)	書屋(軒)	公開施設(軒)	花街関連(軒)	その他(軒)	不明(軒)	駐車場・空地(件)	合計(建築)	合計(全)
昭和34年	153	154	8	2	0	0	1	22	5	2	345	347
平成24年	77	150	2	0	0	3	0	5	1	65	238	303
増減	▼76	▼4	▼6	▼2	0	3	▼1	▼17	▼4	63	▼107	▼44

5 結論

- (1) 北海道・東北地方においては札幌市薄野、秋田市川反、盛岡市八幡町・本町、山形市七日町、酒田市今町、仙台市本橋丁の6か所に持続的に営業している花街が確認され、全て料亭中心の花街である。
- (2) 北海道・東北地方では明治から大正時代に遊郭が移転されること

で、三業主体の花街が形成されるというプロセスが多く事例でみられた。遊郭が移転する際には契機となる出来事があり、火災等の災害が最も多くの事例で要因となっていた。

(3) 七日町花街における花街建築の変遷に関して、昭和中期には現在花街建築が無い花小路の西側の区画にも料亭等が確認された。また昭和中期にあった待合が無くなっており業態に変化があった。七日町花街では昭和中期から後期にかけて多くの料亭が廃業したが、大規模なものを含め5軒の料亭が現在も七日町花街周辺で営業し、昼食時の営業を行う等客層を広げる試みが成されている。

(4) 今町花街における花街建築の変遷に関して、昭和中期には現在花街建築が無い上台町の西側の区画にも料亭等が確認された。七日町花街同様、昭和中期にはあった待合が無くなっている。今町花街では昭和30年代には既に歴史的な花街建築が少なかったが、観光用公開施設として活用することで保全の努力が成されている。

(5) 一般用途建築に関して、七日町花街では商業用途と住居用途の軒数ともに大きな変動は見られなかった。今町花街では、商業用途の軒数が約半数に減少しており、住宅地化する傾向にあるといえる。またどちらの花街でも駐車場及び空地が増加している。

(6) 今後の研究課題として今回入手できなかった昭和初期の史料を探索し、花街の最盛期と思われる時期の建築用途を明らかにすることが挙げられる。また計画論的課題として七日町については景観計画の特別区域指定等の検討、現在1件のみである料亭の文化財登録の拡充が考えられる。また都市計画道路事業による花街景観への影響回避の検討が望まれる。今町については現在検討中の重要文化的景観選定において、花街のエリアを範囲に含める、料亭を重要な構成要素に位置付ける等の配慮が期待される。

【補注】

- 注1) 本研究では花街を「芸妓が存在し、そのサービス業がある程度修正記している場所」、遊郭を「娼妓が存在しそのサービス業がある程度集積している場所」と定義する。
- 注2) 例えば温泉旅館の宿泊客を主な顧客としていること等が挙げられる
- 注3) 花街はかつてほとんどの主要な都市に存在し、その規模はおおよそ都市の規模に比例していたと推測されるため、人口の多い都市を対象地選定の基準としている。
- 注4) 1940年代の北海道・東北地方における人口の多い都市は、上位から仙台、札幌、函館、小樽であった。
- 注5) 芸妓は当時現役で活動しており、中でも最も事情に詳しい人物をヒアリング対象としている。また今回ヒアリングを行った以外に適当な人物の存在は確認できなかった。

【参考文献】

- 1) 大田達、平竹耕三：京の花街 ひと・わざ・まち、日本評論社、2009
- 2) 佐藤正宗、岡崎篤行：近世の町割を継承した近代花街の都市空間と建築特性-新潟新潟の古町花街を対象として-日本建築学会学術講演梗概集(東北)、pp. 781-782, 2009
- 3) 松井大輔、窪田亜矢：神楽坂花街における町並み景観の変容と計画的課題、日本建築学会計画系論文集 680号、pp. 2407-2414, 2012.5
- 4) 井上年和：京都下之森花街の変遷、日本建築学会大会研究報告集 建築歴史・意匠、pp. 147-148, 2014
- 5) 帆刈典子、岡崎篤行：花街を構成する建築物の分布に関する戦後最盛期と現在の変化-新潟市古町花街の三業を中心として-、新潟大学大学院修士論文、2013
- 6) 坂本萌、岡崎篤行：花街を構成する建築物の分布に関する近代最盛期以降の変遷-金沢東茶屋街を対象として-、新潟大学大学院修士論文、2013
- 7) 佐藤智文、岡崎篤行、今村洋一：山形県内における花街建築の残存状況及び外観特性-山形市七日町・酒田市今町を対象として-、日本建築学会北陸支部研究報告集第56号、pp. 342-345, 2013
- 8) 松川二郎：全国花街めぐり、誠文堂、1929
- 9) 上村行彰：日本遊里史、1929
- 10) 加藤政洋：花街 異空間の都市史 pp. 18-20、朝日選書、2005
- 11) 山形家屋明細図、土地地形測量社、1959
- 12) 酒田市住宅明細図、東京交通事業社、1961

[2015年2月17日原稿受理 2015年4月10日採用決定]